

日本現象学会 2019 年度研究大会（第 41 回）
男女共同参画・若手研究者支援 WG 主催ワークショップ
「現象学研究者の留学は今後どうなる？」

オーガナイザー：池田喬（明治大学）[ハイデガー、現象学的倫理学：オーストリア・ウィーン大学（2005-2007）、米国・ニューヨーク市立大学（2016）、デンマーク・コペンハーゲン大学（2016-2017）]

話題提供：赤阪辰太郎（無所属・大阪大学大学院博士課程修了）[サルトル、フランス現象学：ベルギー・リエージュ大学（2016-2017）]、石原悠子（立命館大学）[西田幾多郎、ハイデガー：デンマーク・コペンハーゲン大学（2013-2016）、米国・プリンストン高等研究所（2017-2019）]

特定質問：酒井麻依子（立命館大学）[メルロ＝ポンティ、フランス現象学：留学検討中]

今、研究者としてのキャリア形成にとって留学はどのような意味をもっているのでしょうか。一方で、海外留学が研究者としてのレベルアップに資することは間違いないですし、若い時に国外の研究者と一緒に切磋琢磨することは、将来国際的に研究活動するための人間関係の地盤作りとなります。海外留学がこうした理由で推奨される一方、学振 PD の資格が博士号取得者に限られたこともあり、国内で早く博士論文を仕上げることを優先せざるをえない状況にある人も少なくないと推察されます。

また、留学を考えている人にとって、現象学を研究するために留学先はどこにすればいいのか、留学するための制度として各国にはどのようなものがあるのか、などは、重要な問題でしょう。パリ、ストラスブール、フライブルク、ブッパータール、ケルン、ルーヴェンなど、現象学研究者の留学先として定番と言えるところは、今、どのような状況なのでしょう。あるいは、バーゼルやウィーンはどうなっているのでしょうか。さらに、現象学と分析哲学の接点が大きくなるにつれ、現象学研究でも英語圏への留学を考えている人もいるでしょう。また、コペンハーゲン大学や香港中文大学など、北欧や東アジアで、現象学の研究滞在をする機会も増えています。

現象学研究者としてのキャリア形成にとって留学することの利点は何か、世界中に広がる留学先の状況はどうなっているのか。留学を考えている方、最近留学や在外研究で国外の研究機関に滞在した方、大学で留学に関わる仕事をしている方などが集まって、情報を共有し、国内外にまたがる現象学研究の未来を展望する機会になればと思います。ぜひ貴重な情報をお持ちよりください。多くの会員のご参加をお待ちしております。